

**愛知県公立高等学校における男女共学に関する考察**  
**家政科設置の「女子高等学校」の事例研究（その2）**  
**男女共学の学校から女子校に転換した分校の事例**

**Research on Co-Education in Local Senior High Schools in Aichi Prefecture, Japan**  
**Case Study No. 2 Four Girls Schools that had once been Co-Education**

佐藤実芳（Miyoshi Sato）

はじめに

（1）公立高等学校は男女共学、私立高等学校は別学

新制公立高等学校は、昭和 23 年度にとりあえず設置された。そして愛知県では翌昭和 24 年度に、学区制、男女共学制及び総合制の高校三原則に従い、新制公立高等学校を再編成した。事実上昭和 24 年度に、第二次世界大戦後の公立高等学校が愛知県で発足したといえる。このときに愛知県下の公立高等学校は、一部の例外を除き共学となった。特に戦前の旧制中学校、高等女学校等の流れを汲む男子校、女子校の公立の伝統校は、すべて共学となった。一方、私立の旧制中学校、高等女学校等のほとんどは、男子校、女子校のまま、新制高等学校になった。そして愛知県下ではその後昭和 50 年代中頃まで、私立高等学校の大半は、男女別学であった。このように第二次世界大戦直後愛知県において、高等学校の男女共学は、公立高等学校にほぼ限定されていた。

男女共学の実施が公立高等学校に限定されていた背景には、何らかの政治的な力があつたと思われる。その分析は別の機会に譲るとして、とりあえずは愛知県の教育委員会が男女共学の実施に熱心だったのは間違いない。しかし私立高等学校までも男女共学にする政治の強大な力や教育関係者の激しい熱意はなかった。その結果私立高等学校の大半が男子校、女子校となり、男女別学の運営を維持した。

（2）例外的な公立の女子高等学校

第二次世界大戦以前の日本の中等教育は完全に男女別学であつたから、すべての公立高等学校を男女共学にするにはやはり無理があつた。普通科は男女共学にしてもまだ支障はなかった。しかし職業の性別分業が厳然と存在し、結婚したら専業主婦として家庭に入る女性が多かつた当時、一部の専門高等学校（例えば家政科の高等学校）では、事実上女子の入学しか見込めなく、男女共学の完全実施は困難であつた。そこで拙稿「愛知県公立高等学校における男女共学に関する考察 家政科設置の『女子高校』の事例研究（その1）」<sup>1)</sup>では、昭和 30 年代までに男女共学から一転して女子校になった愛知県の公立高等学校の 4 校の事例を分析し、女子高等学校になった社会的な背景や理由を考察した。

引き続き本稿でも、昭和 30 年代までに共学から一転して女子校になった愛知県の公立高等学校分校の残りの事例を分析し、前稿同様女子高等学校になった社会的な背景と理由を考察する。そして前稿の分析結果も参照しながら、男女共学の普及の紆余曲折と当時の女子生徒が置かれていた教育状況とを明らかにしたい。

### （３）分析対象

共学校と女子校（男子校）の定義や区分は、それ自体複雑な問題である。ある学校の学則等に明確に「女子（男子）生徒のみ入学できる」と規定していれば、その学校を女子校（男子校）と判断できる。しかしながらそのような文章の規定を持たずに、実態として入学者（入学希望者）が女子（男子）に限定されている学校も中にはある<sup>2)</sup>。またそのような規定の存在の確認が困難な場合もある。そこで本稿では入学に関する規定よりも、現実には女子生徒のみを教育していた実態を重視して、女子生徒のみが在籍する学校を女子校と考えることとする。そして、女子生徒のみが在籍した公立高等学校<sup>3)</sup>のうち、開設当初は男子生徒が在籍した男女共学の高等学校であったが、その後昭和 40 年度までに女子校に変わった高等学校 6 校の内 4 校を分析する。残り 2 校の分析は、紙幅の関係で別稿とする。

### （４）昼間定時制

現代の日本の定時制高等学校は、その大半が夜間制課程である。昼間に工場やオフィス等で勤務して夕方から定時制高等学校に通う、「働きながら学ぶ」勤労生徒を主な対象にしている。このような夜間制の定時制高等学校は、まだ経済的な余裕のない家庭が多い高度経済成長期のなかで定着したものである。特に地方の中学生が大挙して大都市部に就職して、大規模な工場（男子の自動車工場、女子の紡績工場などがその典型例）で働きながら学ぶ形態が、定時制の生徒の典型になった。

しかし日本人が総体的に豊かになった昭和 40 年代中頃以降、このような勤労生徒は減少してきて、現在ではさまざまな理由で全日制<sup>4)</sup>の高等学校に通えない多様な生徒を受け入れる傾向にある。そのため現在の定時制高等学校では、昔の「苦学生」のイメージはほとんどなくなった。しかし近年の不況と貧困世帯の増加から、全日制高等学校に経済的な理由で進学できず、定時制課程で学ぶニーズは一定程度ある。ただし現在では中学校卒業者を正規の社員として採用する企業はほとんどなくなったため、どこかの企業に正社員として勤務するのではなく、収入を得るためのアルバイトをしながら通う生徒が定時制高等学校では増加している。

ところで本稿が対象とする、高度経済成長期以前（昭和 30 年代以前）の日本においては、農業従事者が多く、農家の子どもを対象に、農閑期の昼間に集中して学習を行う「昼間制」の定時制高等学校が多かった。遠方の都会の学校に通う経済的余裕のなかった、農村部の女子生徒を主な対象にした「昼間制」の定時制高等学校が日本各地に存在した。今では姿を消したこのような「昼間制」の定時制課程を、本稿では特に分析の対象としている。

昭和 24 年度の新制高等学校の事実上の開設当時は、愛知県の公立高等学校では、分校はす

べて昼間定時制課程であった。都市近郊の農村に分校を設置して、農閑期に学習を集中的に行う機能を担っていた。当然ながら昭和 30 年代になり高度経済成長の進展とともに、このような昼間定時制の高等学校は、時代に合わなくなり、統廃合や全日制課程への転換が行われることになった。

本稿では、開設当初は男女共学の昼間定時制課程からなる分校であったが、その後全日制課程に転換した際に、女子校に変わった高等学校を検討する。この高等学校は全日制課程を設置した際に、昼間定時制課程を廃止したところである。愛知県立西尾実業高等学校吉良分校、愛知県立新城高等学校一宮分校、愛知県立半田高等学校武豊分校、愛知県立刈谷高等学校東浦分校の 4 校が、この範疇に属する。

高度経済成長に伴い、農業高等学校（または農業科）や昼間定時制課程へ進学を希望する生徒は減少した。男子は地元の農業科のある分校ではなく、都市部の高等学校（普通科、工業科等）に通うようになった。一方女子の場合は男子と異なり、遠方の学校へ遠距離通学を避ける傾向があった。そこで第二次世界大戦後に設置された農業科の昼間定時制課程の分校は、昭和 30 年代の高度経済成長期当時、女子生徒に人気の全日制課程家庭科に転換した。男子が敬遠する家庭科（後の家政科や生活科）の高等学校に転換したことで、必然的に女子校になった。そのような学校の事例を、これから分析する。

## 1. 愛知県立西尾実業高等学校吉良分校（現：愛知県立吉良高等学校）

### （1）地域の事情

旧吉良町（平成 23 年、旧西尾市、一色町、幡豆町が合併して、新「西尾市」になる）は、昭和 30 年 3 月、三河湾を臨む旧吉田町とその北部に位置する旧横須賀村が合併して誕生した。南部は漁業、北部は農業が盛んで、水産業も海産物の加工が主である。

### （2）学校設立の経緯

昭和 24 年 2 月 1 日に設置された愛知県立西尾実業高等学校吉田分校（昼間定時制 1 学年定員農業科 40 人）と、昭和 26 年 4 月 1 日に設置された愛知県立西尾実業高等学校横須賀分校（昼間定時制 1 学年定員農業科 40 人）の 2 校が、昭和 31 年 4 月 1 日に合併して、愛知県立西尾実業高等学校吉良分校（昼間定時制 1 学年定員農業科 40 人、家庭科 40 人）になった。これは前述の町村合併に伴う高等学校の統合である。農業科は男女共学なので、吉良分校は男女共学であった。

### （3）全日制課程（女子のみ）への移行

昭和 36 年 4 月、知立高等学校と新城高等学校作手分校が全日制課程（通常制課程）に移行したことを契機に、県内にある分校の大部分の地元の自治体が、昼間定時制課程から全日制課程に切替えるための運動を始めたという<sup>5)</sup>。

旧吉良町も、昭和 36 年 5 月に西尾実業高等学校長対して「吉良分校を全日制にする時の設

置課程について」の案の検討を依頼し、同年 6 月に同校長から 2 つの案（案 1：商業科 1 学級と家庭科 1 学級を設置、案 2：家庭科 2 学級を設置）の回答があった。

提案内容は家庭科単独か、家庭科と商業科の併設の 2 種類で、農業科の開設は西尾実業高等学校の校長の案には含まれていなかった。西尾実業高等学校に農業科が既にあるため、吉良分校には農業科は必要ないという判断であったと思われる。一方近隣の西尾高等学校にあった商業科の別科が昭和 31 年度に廃止されていたため、吉良分校に商業科を設置するよう提案したと思われる。

旧吉良町はこの提案を受けて、同年 8 月に「愛知県立西尾実業高等学校吉良分校を全日制課程の独立高等学校にすることについての陳情書」を作成し、愛知県の知事、議会、教育委員会に陳情を行った。

<参考>

#### 愛知県立西尾実業高等学校吉良分校を全日制課程の独立高等学校にすることについての陳情書

このたび幡豆郡吉良町から西尾実業高等学校吉良分校を現在の定時制課程を全日制課程に変更し、独立の高等学校とするよう関係各位に陳情書を提出されましたが、このことは趣意書にある通り極めて緊要妥当のものと認め、さきに陳情した当地区 3 高等学校（西尾高等学校、西尾実業高等学校、一色高等学校）の学級増の件と共に格別の御高配をたまわり、当地方住民の要望が達成されますよう、理由書並に趣意書を添えて陳情いたします。

なお教育課程について家庭課程と商業課程を設置されるよう希望します。

#### 陳 情 の 理 由

- 1 当地方の高等学校進学率は近年とみに上昇の趨勢にあり、生徒急増期はいうまでもなく、恒久的に考えても、地元 3 高等学校の現募集総数の 2 倍以上の志願者が推定されます。
- 2 吉良分校は高等学校としての整備が進み、独立全日制高等学校として基盤を整え、さらに、地元として、必要施設充実のため協力する用意があります。
- 3 農村事情の変化により、昼間定時制課程存続の意義が乏しく、全日制課程に改めてほしいという希望が地元民の総意となりました。
- 4 教育課程については地域総合制の見地に立って、現行の課程のうち、農業課程は西尾実業高等学校に統合し、一段と当地方の農業教育の振興を図ることとし、女子教育の拡充と職業教育の確立のため、家庭課程と商業課程を設置することが当地方高等学校の態勢として最も適当であると考えて、これを希望いたします。<sup>6)</sup>

第一次ベビーブームで誕生した子ども達が高等学校進学を迎えて、高校生が急増する時期であったため、愛知県はこの時期に全日制課程の新設を希望した分校のほとんどを全日制課程（通常制課程）に移行させた。

吉良分校の場合、昭和 37 年度に定時制課程の募集を停止し、女子のみの通常制課程家庭科（昭和 38 年 4 月に家政科と改称）を設置した。ここに全日制の女子高等学校が誕生した。吉

良高等学校の 20 周年記念誌には、当時の分校主事であった大滝義男が次のように書いている。

「西尾実業の前身の幡豆郡立農蚕学校がこの地にあり 10 年で廃止になりましたので独立校を作るのが吉良町民の悲願でした。・・・(中略)・・・

幡豆郡の進学率は 30～35% で県下でも最低です。いくら生徒募集を行っても定時制では駄目で、早く全日制にしようと努力を続けました。その時、女子の家庭科はよいが男子をどうするか、色々な意見が出たが、結局家庭 2 学級募集の全日制にしたのが昭和 37 年でした。」<sup>7)</sup>

#### (4) 独立校へ

前述の「愛知県立西尾実業高等学校吉良分校を全日制課程の独立高等学校にすることについての陳情書」で、昼間定時制の分校から全日制課程の独立した実業高等学校への変更希望が述べられていた。しかし、当時の吉良分校は 1 学年 2 学級の小規模校であるため、独立校になることは難しかった。それでも同分校は、昭和 38 年 4 月に 1 学年 3 学級定員 150 人に増やし、愛知県内で最大規模の分校となった。

「分校ではなくて早く独立校に」という思いを旧吉良町長はじめ保護者そして生徒も抱き、生徒達はその思いを態度で示さなければならぬと、勉強に真剣に取り組んだという<sup>8)</sup>。旧吉良町では、昭和 39 年度に同分校を独立させることを目指して運動を展開し、昭和 38 年 9 月 14 日に「愛知県立西尾実業高等学校吉良分校を独立高等学校にすることについての陳情書」を、愛知県教育委員等に提出した。陳情の理由は、以下の 4 点であった。

まず第一に、生徒確保の見通しが立っていた。旧吉良町の周辺地域の高等学校進学率が愛知県内でもかなり低かったため、将来進学率の上昇が見込めた。そのためたとえ第一次ベビーブームの中学校卒業生の急増時期が過ぎても、吉良分校への進学希望者は減少しないと期待できた。更に同分校が全日制課程に転換後、名古屋鉄道蒲郡線沿線から生徒が遠距離通学するようになったため、今後町外からも同分校への入学希望者を安定的に確保することが期待できた。第二に、旧吉良町周辺では女子高等学校を新設する要望が強く、近隣の男女共学の高等学校(西尾高等学校、一色高等学校)と競合することはなかった。第三に、昭和 38 年度から吉良分校は家政科 1 学年 3 学級と定員が増え、独立校として施設設備も一応整っていた。第四に、旧吉良町における教育の輝かしい歴史を挙げることができた。旧吉良町は明治 42 年に幡豆郡立農蚕学校が創立され、旧幡豆郡における中等教育の発祥の地に当たる。戦前には、旧吉良町に西尾中学校(現西尾高等学校)、西尾実業学校(現西尾実業高等学校)、西尾高等女学校と 3 校もの中等教育機関があった。だから旧吉良町と旧西尾市の地域には、歴史的にみても独立した高等学校が少なくとも 3 校(西尾高等学校、西尾実業高等学校、吉良高等学校)は存在する基盤があるといえる。

#### (5) 女子校から男女共学に転換

昭和 39 年 4 月 1 日、地元による吉良分校独立の運動が実を結び、吉良分校は愛知県立吉良

高等学校となり、愛知県立西尾実業高等学校から独立した。全日制課程の家政科を設置する、1 学年定員 150 人（3 学級）の女子校として開校した。その後吉良高等学校では、昭和 46 年度より家庭科の 1 学年定員が 180 人（4 学級）に増えた。更に昭和 49 年 4 月 1 日には、愛知県で最初の保育科（女子のみ）が新設された。

その後吉良高等学校は、30 年近く専門高等学校（家庭科、保育科）として、女子を対象に教育を行ってきた。しかし昭和 60 年 4 月 1 日に普通科を新設して（家政科 3 学級、保育科 1 学級、普通科 3 学級）、男子生徒を受け入れ男女共学になった。平成 25 年度現在、各学年普通科 4 学級、生活文化科 2 学級で、入学定員は 240 名である。生徒総数は 701 名（男子 251 名、女子 450 名）である<sup>9)</sup>。その内女子が約 64%を占めるが、その数字は生活文化科（旧保育科、旧家政科）において女子生徒が圧倒的多数を占めていることによる。普通科の学級は男女共学らしく、生活文化科の学級は女子校のような雰囲気がある。

## 2. 愛知県立新城高等学校一宮分校（現：愛知県立宝陵高等学校）

### （1）地域の事情

旧一宮町（平成 18 年 12 月に、豊川市に編入合併され、現在は豊川市）は、愛知県の南東部にある。通称三河一宮と呼ばれる。豊川に沿った地域には田畑が多く、農業を中心として発展してきた。同町は昭和 37 年から昭和 45 年にかけて積極的に企業を誘致して、自然豊かな都市（豊橋市）近郊の町として、人口も年々増加している。

### （2）学校設立の経緯

昭和 24 年 4 月 1 日、愛知県立新城高等学校に一宮分校（定時制課程農業科・家庭科）が設置された。設立の経緯に関しては、新城高等学校史である『創立六十周年記念誌』に、以下のよう記されている。

「終戦に伴う学制の改革で、新制中学の発足を見ると共に、他方昭和十五年以来の伝統をもつ一宮村立青年学校が昭和二十三年三月三十一日をもって廃止されることになった。青年学校は高等小学校卒業生に対し将来自家経営に必要な普通教育と職業訓練を施したもので・・・(略)・・・その職業教育としては、男子には農業、女子には家庭を課していた。・・・(略)・・・

この青年学校の衣鉢をつぐべき新制高等学校教育施設の必要を痛感するのは、一宮村としては蓋し当然のことであろう。時の村長中村泰治氏は新城高校長原田広一氏と相諮り、愛知県立新城高等学校一宮分校（定時制）の設置となった。」<sup>10)</sup>

昭和 24 年度の最初の入学試験では、一宮分校には 51 名が受験し、県下の分校では成績が最もよかったという<sup>11)</sup>。定時制課程には、4 年で卒業する他、短期で修了することができるという規定があった。一宮分校に入学した女子生徒の一部は、家庭科中心に学習して 2 年で修了することを希望していた。そのため同分校には、高等学校卒業を目指す 4 年コースに加えて、家

庭科を中心に学習する 2 年コースが設けられた。終戦直後の日本は、女子が高等学校教育を全うするにはまだ大変な時代にあったのである。

当時の一宮分校の入学者数、卒業者数のデータについては、『創立七十周年記念誌』の卒業生数一覧表と『創立五十周年記念誌』の一覧表の 2 種類がある。両者のデータには若干異なる点がある。どちらの記述が正確なのかは判断しかねるが、本稿では、より詳しい記載のある『創立五十周年記念誌』の数値を用いることにする。

表 1：愛知県立新城高等学校一宮分校の年度・定員・志願者数・入学者数・卒業者数の推移  
(昭和 23 年度～37 年度)

年度		23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
定員 (人)		40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	55
志願者数 (人)		38	51	49	47	45	42	32	49	57	49	55	56	44	29	105
入学者 (人)	農業	17	23	23	20	14	16	9	16	17	19	10	11	9	10	
	家庭	21	26	24	24	31	26	22	30	28	28	43	41	32	19	55
	合計	38	49	47	44	45	42	31	46	45	47	53	52	41	29	55
卒業者 (人)	農業				8	20	13	18	11	13	7	15	12	17	10	
	家庭				0	0	0	0	5	4	4	8	7	10	20	
	合計				8	20	13	18	16	17	11	21	19	27	30	

記念誌編集委員会、『創立五十周年記念誌』、愛知県立新城高等学校、285 頁より作成

表 1 は、一宮分校の年度・定員・志願者数・入学者数・卒業者数の推移を示している。入学者数に関しては、農業科は昭和 26 年度以降次第に減少し、家庭科は開校以降次第に増加している。農業科は男女共学、家庭科は女子のみであったから、結果として男子の入学者数は開校以降次第に減少し、逆に女子の入学者数は年々増加しているといえる。定時制課程の最後の頃には、一宮分校の男子生徒数はかなり減少して、同分校は次第に女子校のような雰囲気になっていたと考えられる。

### (3) 全日制課程 (女子のみ) の開設

一宮分校では、女子向けの家庭科と時代のニーズから取り残された農業科の 2 学科しかなかった。それゆえ男子は、一宮分校に次第に進学しなくなった。そのため同分校は、次第に女子生徒の教育に特化していった。そして昭和 37 年 4 月に通常制課程家庭科 (1 学級 55 名、男女共学) を新たに設けて、昼間定時制課程の募集を停止した。当時家庭科に男子生徒が入学することは考えられなかったもので、女子のみの募集となり、全日制課程への転換とともに一宮分校は女子校となった。

けれども通常制課程家庭科に変更した途端、昼間定時制の頃に比べて広範囲から生徒が集ま

りだした。一宮分校の全日制課程の第1回目の入学試験では、志願者数が増加して、家庭科では県下一の高倍率（定員 55 名に対して志願者数 105 名）となった。そこで一宮分校は翌昭和 38 年 4 月に、1 学年 2 学級に定員を増やした。そして昭和 40 年 4 月、昼間定時制課程に在籍していた最後の男子生徒が卒業して、一宮分校は完全に女子校となった。

#### （４）福祉と看護の専門高等学校（宝稜高等学校）

その後、昭和 45 年 4 月 1 日に一宮分校は、愛知県立新城高等学校から独立して愛知県立宝陵高等学校となった。家政科 1 学年 3 学級で開校した宝陵高等学校は、その後商業家庭科、衛生看護科、生活福祉科等を順次設け、平成 11 年度に男子生徒 1 名が入学するまで、長らく女子生徒のみが通う女子校であった。商業家庭科と生活福祉科は平成 7 年度に募集停止となり、かつての家政科の面影は薄い。現在は看護師を養成する衛生看護科（入学定員 40 名）と、介護福祉士を養成する福祉科（入学定員 40 名）の 2 学科を擁する。両学科とも男女共学であるが、学科の性質もあって男子生徒は少ない。平成 25 年度現在、生徒総数 226 名（男子 14 名、女子 212 名）である<sup>12)</sup>。共学とはいえ、宝稜高等学校では全生徒の約 94%が女子であり、実質的にはいまだに女子校のままである。

### 3. 愛知県立半田高等学校武豊分校（現：愛知県立武豊高等学校）

#### （１）地域の事情

武豊町は、愛知県知多半島の東側中央部に位置する。明治 19 年、東京と大阪を結ぶ幹線鉄道（東海道本線）建設のための資材を運搬することを目的に、JR 武豊線（熱田一武豊間）が開通した。

武豊港は、1 年を通して荒れることが少なく、大型船の停泊が可能な水深もあった。そのため同港は、明治 32 年に愛知県で最初に開港場として指定された。そして後に近隣の港と合わせて衣浦港と呼ばれるようになり、知多・西三河地域のものづくりを支える工業港となった。現在武豊町の臨海部や工業団地に、多くの工場が操業している。また同町の伝統的な産業としては、みそ・たまりの醸造業がある。

#### （２）学校設立の経緯

昭和 26 年 2 月 28 日、武豊町議会が高等学校定時制分校の設置を議決した。定時制分校の設置は、家庭の事情で全日制の高等学校に進学できない、地元の中学校卒業生の進学先の確保のためであった。早速同町は愛知県に陳情を行い、早くも同年 3 月 3 日に愛知県立半田高等学校武豊分校（昼間定時制課程普通科 1 学級）の設置が認可された。しかしふたをあけると武豊分校は全く人気がなく、開校当初入学する生徒は「十余名しかなく、連日家庭訪問をして入学をすすめて、ようやく四十名に達した」<sup>13)</sup> 有様であった。既に昭和 25 年には朝鮮戦争における特需が発生し、戦後復興による製造業での景気が回復しつつあった。そのため工場労働者への需要が高まり始め、農村から都会への人口移動も起きていた。そのような状況のため、農家の子



弟を対象にして農閑期の昼間に授業をさせる昼間定時制課程は、昭和 26 年当時早くも魅力を失っていた。そこで翌昭和 27 年 4 月 1 日、武豊分校は昼間定時制課程を夜間制の定時制課程に変更して、工場で働きながら学ぶ高校生の入学を目指すことになった。

### （３）全日制課程（女子のみ）へ

定時制進学希望者の減少と全日制進学希望者の増加とにより、昭和 38 年 4 月 1 日、武豊分校も他の分校と同様に、定時制課程を全日制課程普通科（女子のみ 1 学級）に変更した。全日制には女子のみ入学したので、武豊分校は事実上女子校になった。その後、男女共学の定時制課程の生徒が全て卒業した昭和 41 年 4 月 1 日から、武豊分校は完全に女子校になった。その後、昭和 46 年 4 月 1 日から募集定員を 1 学級から 2 学級に増やし、更に昭和 48 年 4 月 1 日には 3 学級募集、昭和 49 年 4 月 1 日には 4 学級募集に増やした。

### （４）分校から独立（男女共学）へ

昭和 51 年 4 月 1 日、武豊分校は愛知県立半田高等学校から独立して愛知県立武豊高等学校となり、男女共学になった。第一次ベビーブームの世代が高校生だった時期より約 10 年後ではあるが、その後の高等学校進学率の上昇は昭和 50 年頃まで続いた<sup>14)</sup>。また知多半島の都市化の進展と人口の増加などにより、半田地区とその周辺に高等学校を新設する需要は当時あった。武豊高等学校の場合、独立を契機に男女共学に転換した。武豊高等学校は、本稿でこれまで検討した高等学校と異なり、学科が家政科ではなく普通科である。分校から独立して当然定員も増えるだろうから、女子だけでなく男子も入学させて、定員を確保しやすくしたのである。独立以前は女子校だったので、独立当初は女子の方が男子より多く入学したと思われるが、すぐに男女がほぼ半々の男女共学らしい高等学校になった。平成 25 年度現在、生徒総数 720 名（男子 358 名、女子 362 名）である<sup>15)</sup>。

なお武豊高等学校が独立するまでの経緯に関して、同校二十周年記念誌に以下のように記述されている。武豊高等学校は独立して男女共学に転換したとはいえ、同校を男女共学にすることの意義を認識して独立を求めたということではないようである。あくまで地元で高等学校を設置したいという願いが強かったのではないだろうか。

「日本の社会が高度経済成長を迎えるとともに、全日制課程の分校となり、更に武豊町を中心とした地元の人口増、高校への進学率の急上昇等により、高校設置の強い要望が起こり、地元関係者の熱意と愛知県ご当局のご理解、卒業生の皆さんのご支援等を得て、分校の独立という形で武豊高等学校が誕生したわけであります。」<sup>16)</sup>

## 4. 愛知県立刈谷高等学校東浦分校（現：愛知県立東浦高等学校）

### （１）地域の事情

東浦町は、知多半島の付け根に位置し、尾張・三河・知多を結ぶ交通の要衝の地として栄えた。町の西部は丘陵地帯、東部は衣浦湾に面した田園地帯が広がる。周辺を中規模程度の都市

で囲まれ、ベットタウンの性格をもつ。

## **(2) 学校設立の経緯**

刈谷高等学校史『七十年史』によると、刈谷高等学校教頭（前刈谷北高等学校長）加藤盛久が勤労青少年教育の重要性を力説し、東浦町並びに高浜町に定時制の分校の設置を打診し、町議会が分校設置を議決したという<sup>17)</sup>。

しかし刈谷高等学校には定時制課程がなく、本校に定時制課程がないという理由で愛知県は高浜町に分校の新設を認めなかった。そこで昭和 24 年 7 月にまず刈谷高等学校に定時制課程を創設し、その翌年度の昭和 25 年 4 月に、東浦分校（昼間定時制、普通科、男女共学）が誕生することになった。東浦分校は東浦中学校の校舎の一部を使って開校した。開校当初は、中学校校舎を借用していたため、校舎に高等学校らしさが欠けるなど高等学校としての魅力に欠け、退学や転学の希望が続出したという。しかし昭和 29 年には独立した校舎が完成し、夜間授業も開講して昼夜授業を併せて行うことにした。

## **(3) 分校時代：全日制課程（普通科女子校）へ**

東浦分校は、昭和 37 年 4 月に定時制課程を女子のみの通常制課程（全日制）普通科に転換し、全日制課程は女子だけの高等学校となった。そして定時制課程は、最後の男子生徒が卒業した昭和 40 年 3 月に終了し、東浦分校は全日制課程の女子校となった。さらに昭和 48 年 4 月に同分校は独立して、愛知県立東浦高等学校になった。

## **(4) 独立：普通科男女共学**

昭和 48 年 4 月、東浦分校は、地元の期待に応える形で普通科男女共学の愛知県立東浦高等学校となった。東浦高等学校は、武豊高等学校の事例と同様に、分校から単独校になる際に男子生徒を受け入れ男女共学を導入した。普通科の高等学校だったので、男女共学に躊躇することがなかった。

## **終わりに**

### **(1) 分校は当初、昼間定時制課程**

昭和 24 年以降設けられた公立高等学校の分校は、当時の農村地帯に設置されたもので、すべて昼間定時制であった。開設当初は女子生徒のみを対象とした分校は少なく、多くが男女双方の生徒を対象としていた。しかしその後日本の経済が高度成長するとともに、農業も人手を多く必要としない農業経営に変化するにしたがい、男子は都市部の全日制課程の高等学校に進学し、定時制課程の分校に入学する者は減った。

### **(2) 定時制から全日制へ**

女子の高等学校進学率が上昇したため、女子の分校への入学者数が増え、一部の分校が女子

生徒のみを入学させて女子校となった。女子は、卒業までに4年必要な定時制課程より3年で卒業できる全日制課程を好んだため、定時制課程の志望者は減り、代わって全日制課程の志望者が増えた。愛知県立吉良高等学校や愛知県立宝陵高等学校のように、共学の昼間定時制課程を廃止して、新たに全日制課程を設置してその学科を家庭科とし、女子生徒のみを入学させる高等学校もあった。両校とも、昼間定時制課程を全日制課程に転換すると、入学希望者が急増した。特に昭和30年代後半は、ベビーブームの世代が高等学校に入学し、引き続き昭和40年代には高等学校進学率が急に上昇して、高等学校が入学定員を拡大した。

### **(3) 家政科の専門教育は、女子のみに**

昭和24年に愛知県で新制高等学校を設置した際、高校3原則の一つである男女共学を可能な限り実施した。ところが昭和40年代までの愛知県では、女子向けの教育を行う学科、特に家庭科(家政科)の需要も高かった。しかし男女共学という理想と、家庭科(家政科)の教育実践とはこの時期必ずしも両立しなかった。その結果、公立の女子高等学校が数校誕生することになった。なおこの時期教育関係者には、男女共学の原則を守ろうと声を高くして要求する人々が、資料をみる限りはほとんどなかったように思われる。

### **(4) 高等学校進学者の急増が女子校を生む**

高等学校進学率の上昇、特に全日制課程への進学希望者の増加に対する対応として、愛知県は新設高等学校を増設するとともに、既存の分校を拡充させて独立させる方法を採用した。その中で家政科(家庭科)単科の県立女子高等学校が3校(古知野高等学校、吉良高等学校、宝陵高等学校)、愛知県に誕生した。男女共学の原則を守ることも、高等学校進学希望者をまず収容することを優先した、愛知県の教育委員会の当時の方針が窺える。なお古知野高等学校については、別稿で検討する。

### **(5) まとめ**

男女共学の教育と女子校における教育に関して、本稿が検討した4校の高等学校に関する検討結果は、表2に示すようになる。

分校として学校が開校したのは昭和24年度から26年度の、第二次大戦直後の高等学校が3校である。愛知県立西尾実業高等学校吉良分校(現:愛知県立吉良高等学校)のみ開校年度が遅いのは、愛知県立西尾実業高等学校吉田分校(昭和24年2月1日設置)と同横須賀分校(昭和26年4月1日設置)との2校が合併して、昭和31年度に吉良分校になったからである。開校当初は4校とも昼間定時制課程で、学科は農業科・家庭科が2校、普通科が2校である。

女子校になった年度は、昭和37年度から昭和38年度である。第一次ベビーブームの世代が高等学校に入学する昭和37年度~昭和39年度に、ほぼ重なっている。そして女子校になったきっかけは、4校全部が全日制課程への転換であった。全日制課程に転換したときの学科は、家庭科が2校(吉良高等学校、宝陵高等学校)、普通科が2校(武豊高等学校、東浦高等学校)

であった。

表 2：男女共学の分校から女子校となり、再び男女共学に戻った高等学校

校 名	開校年度	女子校開始年度★	男女共学への復帰年度
	設立時の課程	女子校時代の課程	男女共学に復帰した契機
	設立時の学科	女子校時代の学科	現在の学科
愛知県立 吉良高等学校	昭和 31 年度 昼間定時制 農業科・家庭科	昭和 37 年度 全日制 家庭科	昭和 60 年度 普通科新設 普通科・生活文化科
愛知県立 宝陵高等学校	昭和 24 年度 昼間定時制 農業科・家庭科	昭和 37 年度 全日制 家庭科	平成 11 年度 男子生徒入学 衛生看護科・福祉科
愛知県立 武豊高等学校	昭和 26 年度 昼間定時制 普通科	昭和 38 年度 全日制 普通科	昭和 51 年度 独立 普通科
愛知県立 東浦高等学校	昭和 25 年度 昼間定時制 普通科	昭和 37 年度 全日制 普通科	昭和 48 年度 独立 普通科

★：女子校時代の開始年度は、入学生が全員女子になった年度

男女共学に戻った年度は、昭和 48 年度から平成 11 年度までと、学校ごとにかかなり異なる。昭和 40 年代後半から 50 年代初めにかけて（東浦高等学校・武豊高等学校）が 2 校、昭和 60 年度が 1 校（吉良高等学校）で、平成 11 年度が 1 校（宝陵高等学校）である。男女共学に戻ったきっかけは、新学科（普通科）設置が 1 校（吉良高等学校）、男子生徒の入学が 1 校（宝陵高等学校）である。また分校から独立したことが、共学化のきっかけとなった高等学校は 2 校（武豊高等学校、東浦高等学校）であった。そしてこの 2 校は、共学化の年度が昭和 48 年度、同 51 年度と、比較的早く男女共学に戻っている。

## （6）結びにかえて

高等学校は、大学進学に生徒が備える学校（普通科高等学校）と就職の準備をする学校（専門高等学校）の 2 つに大別できる。小学校や中学校の義務教育と異なり、特に専門教育では、特定の職業に就く準備を行う。そのためその職業に従事する者の圧倒的多数が女性または男性なら、その職業を目指す専門高等学校の生徒がどちらか一方の性に限定される。例えばパイロットの大半が男性で、看護師の大半が女性であるので、航空学校の生徒の大半は男性で、看護学校の生徒の大半は女性である。このように社会における職業で性別が分かれる傾向にある限

り、専門高等学校において、男女共学を徹底することは難しい。それゆえ現在以上に職業の性分化が徹底していた昭和期の高等学校で、一時的にせよ男女共学から女子校に戻る事例が出るのはむしろ必然的である。卵が先か、鶏が先かという議論がある。それと同じように、社会の性分業と男女共学は、複雑に絡み合っている。

また今回検討した分校の女子校化の事例は、当然同時期に愛知県以外でも見出すことができると思われる。これらについて、フェミニストや女性運動家が問題にしたと言う事例は、著者の知る限りではほぼない。ところが伝統のある所謂名門校が共学になるという場合、卒業生が反対したり、地域のマスコミが取り上げたりする。日本においては、男女共学か別学かという議論は、高等学校では主に普通科高等学校、特に所謂名門高等学校において発生する。しかし、社会の重要な構成員となる大多数の高校生が共学で学ぶか別学で学ぶかという議論も、一部の所謂名門高等学校の生徒と同様重要であるべきである。本稿がそのような意識を高める契機となれば幸いである。

#### 【注】

- 1) 『愛知淑徳大学論集 ―教育学研究科篇 第4号』、2014年、55頁―70頁。
- 2) 例えば熊本県立第一高等学校は、男女どちらも入学できる男女共学の学校であるが、昭和53年度から平成23年度までの34年間、男子生徒の在籍はなかった。
- 3) 在籍生徒の性別は、『昭和40年度版 全国高等学校一覧』に依拠する。
- 4) なお昭和38年3月18日 愛知県教育委員会規則第3号「愛知県立高等学校学則」の一部改正で、「通常制課程」の表現が「全日制課程」に改称された。そのため本稿では、一般に「全日制課程」の表現を用いるが、昭和38年以前に限定して使用する場合は「通常制課程」を用いる。
- 5) 創立六十周年沿革史編集委員会、『六十年史』、愛知県立西尾実業高等学校、1968年、69頁。
- 6) 同上書、70頁。
- 7) 愛知県立吉良高等学校『創立二十周年記念誌』、愛知県立吉良高等学校、1983年、18頁。
- 8) 同上書、3頁。
- 9) 「探そマイ！スクール 愛知県立吉良高校」（2014年1月31日閲覧）  
[http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL\\_CODE=128](http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=128)
- 10) 記念誌編集委員会、『創立六十周年記念誌』、愛知県立新城高等学校六十周年記念誌編集委員会、1972年、284頁。
- 11) 記念誌編集委員会、『創立五十周年記念誌』、愛知県立新城高等学校、1962年、286頁。
- 12) 「探そマイ！スクール 愛知県立宝陵高等学校」（2014年1月31日閲覧）  
[http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL\\_CODE=152](http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=152)
- 13) 愛知県立半田高等学校、『愛知県立半田高等学校誌』、愛知県立半田高等学校創立記念事業実行委員会、1980年、387頁。

- 14) その後高等学校進学率は90%強で安定する。
- 15) 「探そマイ！スクール 愛知県立武豊高等学校」(2014年1月31日閲覧)  
[http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL\\_CODE=093](http://www.manabi.pref.aichi.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=093)
- 16) 愛知県立武豊高等学校、『独立二十周年記念誌』、愛知県立武豊高等学校創立二〇周年記念事業実行委員会、1995年、3頁。
- 17) 愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念誌編集委員会、『愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念誌』、愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念事業実行委員会、1988年、56頁。

#### 【参考文献】

1. 愛知県立刈谷高等学校創立六十周年記念誌編集委員会、『愛知県立刈谷高等学校創立六十周年記念誌』、愛知県立刈谷高等学校創立六十周年記念事業実行委員会、1978年。
2. 愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念誌編集委員会、『愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念誌』、愛知県立刈谷高等学校創立七十周年記念事業実行委員会、1988年。
3. 愛知県立吉良高等学校、『二十周年記念誌』、愛知県立吉良高等学校、1983年。
4. 愛知県立吉良高等学校、『家庭科のあゆみ』、愛知県立吉良高等学校、1983年。
5. 記念誌編集委員会、『創立五十周年記念誌』、愛知県立新城高等学校、1962年。
6. 記念誌編集委員会、『創立六十周年記念誌』、愛知県立新城高等学校六十周年記念誌編集委員会、1972年。
7. 愛知県立新城高等学校創立70周年記念誌編集委員会、『創立70周年記念誌』、愛知県立新城高等学校創立70周年記念事業実行委員会、1982年。
8. 愛知県立武豊高等学校、『独立十周年記念誌』、愛知県立武豊高等学校、1985年。
9. 愛知県立武豊高等学校、『独立二十周年記念誌』、愛知県立武豊高等学校創立二〇周年記念事業実行委員会、1995年。
10. 愛知県立半田高等学校、『愛知県立半田高等学校誌』、愛知県立半田高等学校創立記念事業実行委員会、1980年。
11. 創立六十周年沿革史編集委員会、『六十年史』、愛知県立西尾実業高等学校、1968年。